

元暁法師の錚観法の研究

徐 榮 愛

序 論

七世紀の新羅仏教は、三国統一という戦乱の渦中に国家的に必要な護国仏教研究が盛んになり、戦乱中における国民の護国精神を鼓舞激励する役割を仏教界が担ったのである。護国經典といわれる『金光明経』^①に対する註疏類の中に新羅の学僧の註疏が多いのは、このような当時の新羅仏教界の状況を示している。新羅の浄土教学も七世紀の戦乱中の護国の必要な仏教学であったといえる。三国統一の以前には「彌勒上下生経」^②類の往生浄土の思想が活発に研究されたが、統一以後は弥陀往生浄土の思想が研究された。それは新羅の浄土教学の特色であり、新羅の護国仏教思想の特色である。このような新羅仏教の特性を最もよく示しているのは、元暁の実践仏教である。元暁の仏教思想は一乗如来藏思想であるが、彼の実

践仏教は「錚観法」を中心として考察することができる。一般的には、日本の踊り念仏の聖である空也と一遍に元暁の無碍歌舞念仏の影響があったといわれているが、具体的に仏教学的の依據が曖昧である。「錚観法」とは新羅の往生浄土の説話である『広徳嚴莊』の中で新羅の元暁法師が嚴莊へ教えた観法である。^③今までその錚観法に關しては、『觀無量寿経』の十六観法を意味する浄観法・或いは元暁の『二卷無量寿経宗要』を意味する浄観法であるという解釈などがあるが、元暁の実践仏教としての錚観法が教学的にどのようなものかについてはまだ明確ではない。錚観法をどのように誤字や音訳によって解釈するよりも『三国遺事』の原文をそのまま解読し、元暁の独特な実践仏教として彼の全仏教思想の中で、どのような教学に依據した実践思想かを考察することが根本的な研究方法であると考える。即ち、なぜ元暁は錚観

法と呼んだのか、なぜ自ら無碍歌舞念仏行をおこなったのかを彼の仏教思想の流れに探し求めなければならないと考える。本論文はそのことを元暁の仏教思想から探して解明しようとする。それによつて『三国遺事』の広徳嚴莊の説話が今より明らかにすることができるし、元暁の無碍歌舞念仏行が歴史的事実として正しく評価することができる。

一 元暁の仏教思想

元暁の仏教思想の特色は、彼以前の教判研究者達の宗派的教相判釈を克服する和諍思想にある。彼の和諍思想は多様な教相判釈を仏の一心如来藏思想へ会通させる思想である。元暁は仏の全ての教えを一乗如来藏教であると言ひ、全ての言教を一乗へ帰入するべきものと判釈し、宗派的な論諍を和諍する。即ち元暁によると、三乗方便説は仏の教えの多様な説き方を意味すると釈し、一乘眞実説は仏の覚りの境地の絶対普遍的な一法界を意味すると釈し、大乘仏教という教えにおいては一味であると言つて百家の異諍を和諍している。

統衆典之部分 帰萬流之一味、開仏意之至公、和百家之異諍^③。

元暁は仏の言教とは衆生を仏智へ導くものであるから、全ての教えは一乗教であり、衆生はその一乗教によつて仏智まで至るのであると言っている。また元暁はこの一乗教によつて衆生が成仏するから、仏の広大な方便説は如来藏教であるといつて、諸仏の理法は如来藏平等性であり、仏法の義理は衆生を救済する一乘道精神であると説明している^⑤。元暁は仏の一心、一法界から見える諸法はただ一心法であるが、衆生の多様な如来藏に従つて説く説法は如来藏教であると釈し、大乘仏教は一心如来藏思想であると言っている。即ち、元暁の和諍思想はこの一心如来藏義に基づいて宗派的な教相判釈の論諍を和諍する教学であり、その一心如来藏義を実現する仏道は一乘道行であるが、彼以後の教判研究者達の諍論で引用される元暁の教判を見ると、元暁の和諍思想がその教判研究者達に正しく伝わらなかつたことを知る事ができる。元暁の仏教思想を確かめるためにその引用を見ると次のようである。

④海東新羅元暁法師造此經疏亦四教、

一、三乘別教謂如四諦教緣起經等、

二、三乘通教謂如般若經深密經等、

三、一乘分教如瓔珞經及梵網經等、

四、一乘滿教謂華嚴經普賢經。積此四別、

⑤然三乘共學、名三乘教。於中未明法空、名別相教。說諸法空 是為通教。不共二乘、名一乘教。於中未顯普法。名隨分教。具明普法、名円滿教。⑥然此大同天台、但合別円、加一乘分耳。自言且依乘門、略立四種・非謂此四 遍攝一切、故無有失。

④は法藏、李通玄が引用した部分であり、⑤は澄観が引用した部分と同じである。⑥の中の⑥までは慧苑が引用した部分と同じである。⑥の後の部分は、澄観のことばである。即ち、澄観は元暁の教判について自分の考えを述べている。要するに、引用する④と⑥の中の澄観のことばを除いて、④から⑥までは元暁の『華嚴經疏』のある部分に相当するのであるといえる。元暁の『華嚴經疏』の全文が現在に残っていないため、このようにして見る方法しかないのである。法藏と李通玄が引用した④部分は、元暁の教判であるとはいえない。法藏と李通玄が『華嚴經』を中心とする教判論を主張するために、元暁のことばの一部分を引用したものであると考えられるからである。問題は⑥部分に表われた元暁の考えを伝えず、ただ四教判だけ元暁の教判であると言ったことにある。澄観や慧苑も同じ華嚴教学僧であるけれども、法藏

や李通玄より元暁の教判の意をよく了解しているものと考えられる。しかし、澄観は元暁の教判と天台智頭の教判とが類似すると言っているが、元暁は『涅槃宗要』で天台の教判を根本的に否定している。

隨時天台智者問神人言、北立四宗會經意不。神人答言失多得少。又問成実論師立五教稱仏意不。神人答曰小勝四宗猶多過失。然天台智者禪惠俱通舉世所重、凡聖難測、是知仏意深遠無限、而欲以四宗科於經旨 亦以五時限於仏意、是猶以螺酌海用管闚天者耳。教迹淺深略判如是⑦。

即ち、元暁は教判とは仏教の根本の教えや仏意ではなく、蛇足であると評価している。そして元暁は仏意と教えとは衆生救済から考えるべき問題であると言ひ、仏説を判釈し分類することは竹の孔で空を見ることのようにであると云っている。即ち、仏の教えは仏の慈悲心の現われであり、仏の意を具現することであるから 仏の教えを教判することは、愚かなことであると言っているのである。

澄観は元暁の教判とはただ「乘門」によって四種を略立したものであり、四教判は四偏の四種ではなく、一切を撰す四遍の意味であると言っている。即ち、元暁の教判は法藏や李通玄が言ったような四教判ではないことを

知ることができる。同じ華嚴教家であるけれども、法蔵、李通玄より澄観が元暁の教判の意をよく読んだといえる。新羅の表員も澄観が読んだ元暁の教判の思想を同じく解釈して伝えている。そのことを見ると、次のようである。

普法義、第一積名者。普者溥也。謂遍義普也。法自體義軌則義如常說也。謂一切法相入相是。言相入者、元暁謂一切世界入一微塵、一微塵入一切世界如一微塵、三世諸劫入一刹那、一殺那入三世謂劫一切利那、一切亦爾、爾、謂一切法及一切門、一是一切。一如是廣蕩名為普法。^⑧

即ち、元暁の教判は中国の諸教判研究者達のように特定の經典を中心とする教判ではないのであり、元暁は仏の教えに対して価値の優劣、深淺を言うことができないうのである。それは先ず仏教の根本精神や目的を洞察した思想であるといえる。要するに、元暁は仏陀はなぜ三乗教を説いたのかを熟考して教判の論證を仏陀の意と仏教の根本目的へ再び戻させたのである。元暁は仏陀の意と教えの理を一乗道精神と如来蔵平等性であると言ひ、衆生は一乗道精神、如来蔵平等性によってみな成仏すると言ふ。即ち、諸仏の説法は一乗道精神の顕現として全ての衆生を仏智まで導くものであるから、仏の全て

の説法は三乗教も一乗教であると解釈するのである。要するに、仏教の根本目的は、全ての衆生を救済するための教えであり、仏の全ての説法は衆生救済の一乗教であると解釈するのである。そして元暁は、一乗教の普遍義を顕わせば一乗滿教、また顕わさなければ一乘分教であり、ただ法空の義を顕わせば三乘通教、また顕わさなければ三乘別教であると説明しているのである。即ち元暁は仏の教えを一乗理の普法と法空の義としてまとめるのである。元暁は一乗理を一乗如来蔵、或いは一心如来蔵と解釈し、普法義を一乗道精神、法空義を如来蔵平等性であると説明する。^⑨要するに、元暁の仏教思想は普法義と法空義の一乗如来蔵、一心如来蔵思想であるといえる。元暁が「華嚴・普賢の教え」を一乗滿教と言ふのは、華嚴の無碍法門は仏の智慧（一乗の普法義）であり、普賢の慈悲利他行は仏の如来蔵教（仏性平等性を顕わす法空義）であると積すからである。元暁は普賢菩薩の利他行を隨如度行、文殊菩薩の向上門的修行を隨事行、隨識行であると積し、仏道に三行があると主張している。即ち、元暁の一心如来蔵思想は、理智的な面においては文殊菩薩の無住無得の般若智慧に基づいているが、実践的な面においては普賢菩薩の慈悲行に基づく饒益衆生の教

化行であるといえる。

二 元暁の浄土思想

元暁は浄土思想を凡夫為主の教学であると言う¹⁶。凡夫と聖人は本性的には差別がなく、同じく清浄心を持った存在であるが、凡夫は、煩惱の散乱分別心を起こして本来清浄一心から離れているので、信心成就が難しいのであると言う。それ故に諸仏如来は如来願行の所成である浄土へ凡夫を往生させると言う¹⁷。そして凡夫の往生浄土は如来本願を信じることから始まると言う。即ち、如来を信じる宗教心（発菩提心の善根）によって依報の浄土へ往生すると言うのである。元暁は往生因に対して『観無量寿経』の十六観、『往生論』の禮拜、讚嘆、作願、觀察、廻向の五念門、『無量寿経』の上、中、下輩を中心として凡夫往生論を立てる¹⁸。往生の正因は発菩提心の善根であるが、正定聚は隨理発心で仏の眞如法身を觀ずれば往生することができる¹⁹と言う。即ち、これは『金剛三昧経論』で仏道の三行の中に菩薩道の初信解から等覺位までの六相行觀を隨事行と隨識行と分けて説明する向上門である。しかし元暁は散乱分別心の凡夫が現実的に実践することができる易行を中心として凡夫の往生の道

を明らかにする。『遊心安樂道』の九品往生の配置を見ると、上品三位を十信菩薩、中品三位を二乘、下品三位を凡夫としている。即ち、往生することができる品數を凡夫から始める¹⁶。五逆十惡者の往生に対しては、懺悔すれば往生することができる¹⁷と解釈した。この懺悔の解釈は、新羅の多くの浄土教学者の共通的な解釈として新羅浄土学の特徴である。そして元暁は不定性人も懺悔すれば往生でき、淳浄心の口称念仏をすれば往生でき、『阿彌陀経』の名だけを聞いても往生できると解釈し、不定性人の往生を強調している。これは、凡夫往生論であるといえる元暁の浄土学の特徴である。元暁は下輩十念においても不定性人の往生を顯了義として強調する。下輩の十念隱密義は『彌勒發問経』の慈等の十念義として初地菩薩以上の所生の純浄土に対する因であり、顯了義は『観無量寿経』の下下品の十念義として凡夫所生の土に対する因である¹⁹といひ、凡夫は顯了義によって往生する¹⁹と言う。元暁の浄土教は凡夫為主の教学であるけれども、元暁の浄土学の中に『観無量寿経』に対する註釈書がないので十六観に対する元暁の解釈を知ることとはできない。しかし元暁の著述の中で禪の理論を論じている『金剛三昧経論』と彼の代表的な著述である『大乘起信

論疏』を通じて観行に関する解釈を考察することができ
る。

三 元暁の定心観と散乱心観

元暁は『金剛三昧経論』の要は、一味観行であり、宗
は十重法門であると言う^⑱。先ず元暁は観行を「観」と
「行」の両面で説明する。「観」とは観行者自身の見る
智と見られる境との関係を説明する横的論理であり、
「行」とは観行者の修観の因果論、即ち、十信行位から
等覚行位までの六行位を説明する豎的論理であると言っ
ている。元暁は『菩薩瓔珞本業経』の菩薩道の五十二階
位説を応用して、初信解から等覚位までを因の階位、妙
覚を果の位であると言う。元暁は仏道を初信解者の因位
から仏の果位までの観行論として解釈する。

元暁は境を直俗双泯、智を本覚始覚であると言い、因
位から果位までのそれぞれの段階で観行者はこの境智を
観ずると言う。元暁はこの境智の一味性を修観すること
によって観行者の煩惱を断することができると言う。即
ち、観行者は六行位の修習によって八識を転じて九識へ
入ることができ、諸仏のように法界を清浄にすることが
できると釈す。唯識宗では六行観は煩惱の現行を伏する

ことはできるが煩惱の種子を断することはできないと説
いている。しかし元暁は煩惱の種子を持つている八識が
転ずることによって煩惱の種子を断じ、無垢清浄の九識
へ入って、諸仏のように法界を清浄にする後得智を得る
と言う。即ち元暁は八識転変と九識顕現を衆生を教化し
引導するために再び因の分位に出て来られ、従果向因の
法界体性智を三身と顕現する仏のと同じであると解
釈している。要するに仏の従果向因の三身（法身、報身、
応身）の分位によって法界は清浄するし、法界の五法は
それによって過去も、現在も常に円満していると言い、
菩薩の観行も従因向果の向上門と従果向因の下向門の不
二門の実践道であると釈している。元暁の観行論はこの
ように菩薩が求める仏智と法界を清浄にする如来の清浄
世間智の不二の実践観法として特色があるといえる。

次に十重法門では、具体的な実践観法として説明する。
先ず元暁は理入と行入の二入観行を説明する。元暁は理
入とは理に順じて信解してもまた證行をおこなう段階
（初信解から十廻向までの四位）の理観であり、行入と
は理観を修行し無相行をおこなう段階（十地行位と等覚
行位）の実践行であると言う。元暁は行入を『自利行
入』と『令他入行』の二行として説明する。元暁は行入

の二行とは人法空の證得行であると言ひ、人法空の證得行は自分の心を觀ずる人空と衆生教化行を実踐する法空なのであると言う。元暁は觀行者が心を觀ずるときに空性の寂滅を取らず、衆生救済行を捨てない行こそ二空無我の證得行であると言う。即ち、元暁は行入を「自利行入」の十地位と「令他入行」の等覺行位と分けて説明しているのである。これは十地位の觀心と等覺行位の衆生教化行を二種の行入であり、觀心と衆生教化行の行入は地上菩薩の觀と行であると積すのである。

また、元暁は觀心の対治法を六双としてまとめ、觀心するときには、心の能所を対治し、能所の平等性（空性）を知らなければならぬと強調する。即ち、元暁は心の能所の六双対治によって八識を転変させ六位心の煩惱を離れることができると説明する。元暁は十種法門の第三門で六双対治の觀心を三性三無性觀として説明する。元暁は三諦三觀を觀心することによって唯識の三性を知、三空聚、三有心を滅することによって三無性を證得し、第九識へ入るのであると言う。元暁は十重法門をこの第三門の三性三無性觀を中心としてまとめている。即ち、一行三昧の十重法門を三性三無性觀の理觀の頓悟觀門とまとめるのである。第三門は三仏身へ帰依して、三仏身

は本来的に無自性空であることを知り、自心の三有心を滅する觀心法である。元暁はこれを隨識行の修行であると言う。元暁は觀行の次第を隨事行、隨識行、隨如度行の三つであると言ひ、觀行者はこの三行の修習次第を実践しなければならぬと言ひ、そして元暁は第三門の觀心法を一心三觀の隨識行であると言ひ、一心は一心眞如を示すことであり、三觀とは三慧觀による三解脱を示すことであると言ひ、元暁は一心三慧觀を眞如門によって一心の眞如を悟ることであり、生滅門によっては煩惱心を対治することであると言ひ、即ち、元暁は方便觀とは初地に入る前に散乱心中で止觀を修習する四位（十信位から十廻向位まで）の觀法であると言ひ、方便觀は觀行者の根機や業報の差別に随つて行う方便道であると言ひ、しかし正觀は初地菩薩が一時に一心の眞如を頓悟する理觀であると言ひ、要するに、元暁は方便觀は生滅門の心相を觀じて煩惱を対治する漸悟觀であり、正觀は心性の眞如を觀じて中道第一義諦を證得する頓悟觀であると言ひ、²⁶。そして元暁は方便觀を「遣俗觀眞」の二諦平等觀であり、正觀を「融眞觀俗」の中道第一義諦觀であり、方便觀は正体智の方便、正觀は後得智方便であると積すのである。²⁷元暁の觀行論を華嚴教学でいえば、

妄尽還源觀と事事無礙法界觀であるといえる。妄尽還源觀はどこまでも仏の悟りの世界に向かうための觀であり、その究極に達してから事事無礙法界の世界が開けてくる行である。即ち、元曉の觀行論は、菩薩道の実践と仏の大悲の衆生教化の不二の教えである。

四 元曉の如来光明眞身觀

元曉は仏道の隨如度行を如来の光明と釈して説明する。元曉は『華嚴經疏』で仏の悟りの体と用を觀ずることによって諸仏のように衆生教化をすることができると言う。元曉は仏の悟りの体と用を觀ずる如来光明眞身觀法を次のように説明する。諸仏如来の覺の光明は衆生の煩惱を除滅せしめ、如来法身を遍く広めて法界を清淨にすることである。³⁰この道理によつて無始以来から諸法は円満であり、如来の仏法は常住である。觀行者はこのような理法を證得し、不顛倒の悟り、無分別智を清淨世間智と變化しなければならぬと説明する。即ち、元曉は隨如度行を後得智の淨法界等流として説明する。瑜伽唯識においては清淨世間智が無分別智とならびはたらく無住處涅槃の実践を内容とするが、元曉は無分別智（法身）が清淨世間智（報身、受用身）になつて応化身の説法する形

を光明と表現している。即ち、仏の応化身の説法によつてわれわれが法身、眞如の仏の世界へ入らしめられるのであると説明している。元曉は仏の自内證智のこのような顯現を光明と言ひ、光（悟り）と明（顯現）を一つの働きとして説明するのである。即ち、元曉は仏智とは本来的に法を享受する内明と清淨世間の外朗の両面に持つており、³¹また仏とはその法界が淨化せられることによつて法界が自己顯現せる姿であるから、諸菩薩は如来光明眞身觀を觀じて、その仏智と仏界を實踐しなければならぬと言ふ。元曉はそれを諸仏如来の意、智、業の無礙門であり、法界を清淨にする淨土門であると言ふ。そして元曉は『無量壽經宗要』に次のように言ふのである。

華嚴經云如来正覺成菩提時、得一切衆生等身、得一切法等身乃至、得一切行界等、得寂靜涅槃繫等身、佛子隨如来所得身、當知音聲及無礙心亦復如是、如来具足如是三種清淨無量。³²

それ故に元曉は、衆生は如来の三仏身の徳の光明によつて自ら無礙心行をすると言ふし、觀行者は一心に如来光明眞身を觀じなければならぬと言ひ、一心に法身、報身、応身を修觀することが淨土の体であると言つてい

元暁は隨識行では觀心の対治法を六双として説明したが、隨如度行においても觀行者は自分の無住無得智を衆生教化行の智と轉化しなければならぬと言ひ、隨如度行の六双修を説明する。隨如度行の六双修は仏の功德を明らかにし、饒益衆生の法門を開く段階の清淨世間智の法行である。元暁は如来光明眞身觀の六双修を次のように言っている。

一者問佛見佛為双、二者能說能化為双、三者聞仏音見
仏身以為双、四者著有無著聞以為双、五者下喻上法、
六者外譬内法。此後兩双依此量門、證成仏身周遍之義、
上來十重光明遍照、顯佛色身無所不遍、下重說偈讚仏
功德、明佛内徳亦無不周。

元暁は、如来光明眞身觀とは觀行者が六双修によつて自ら仏色身を明らかに顕現し、本當の仏徳、まことというものが現われる姿を觀ずる觀法であると言っている。元暁の淨土教学に關連して、如来光明眞身觀の六双修を見ると、第三の聞仏音見仏身の双修は、称名念仏と十六觀の修習觀であるといえる。『觀無量壽經』の十六觀は、第一觀から一つ一つに修觀し最終的に三尊仏身觀（第九、第十、第十一觀の阿彌陀仏、觀世音菩薩、大勢至菩薩）を修觀し、第十二普想觀で修觀行を完成する觀法である。

十六觀は初めに事相觀から一つ一つに修觀し、最終的に三仏身觀の理觀を修習し、第十二普想觀で如来光明眞身觀を完成する觀法であるといえる。即ち、元暁はその三段階の修習次第觀を『金剛三昧經論』『起信論疏』『華嚴經疏』『無量壽經宗要』に一貫して隨事行・隨識行・隨如度行であると説明している。要するに、元暁は、事觀を隨事行の方便觀、理觀を隨識行の正觀（三仏身觀、三性三無性觀）、眞身觀を隨如度行の如来光明眞身觀として説明しているのである。

五 『金光明經』の三身説

元暁は彼の多くの著書のなかで『金光明經』を金鼓經と呼んでいる。元暁はなぜ金鼓經と呼んでいるか、その理由を探究るために、元暁が讀んだと考えられる『合部金光明經』を見ると、この經は大乗經典の中で三身説を最も体系的に説いている。この經は第二如来壽量品、第三三身分別品、第四懺悔品を中心に編成されているし、信相菩薩という大乘菩薩を通じて大乘行を説明している。第二如来壽量品は、仏陀とは歴史上の積尊のみを意味することではなく、仏身は通常人の身体を超える円満さや清淨さ（三十二相、八十種好）とすぐれた能力（十力、四

無所畏」とをもつものであると説いている。その教えによって信相菩薩は佛身の無漏、無量の寿命を知る内容である。第三三身分別品は、佛身の奥底に佛をして佛たらしめる根拠としての理と目に見えない理仏を教えて、

自身には法身、応身、化身の三身があると説明する内容である。第四懺悔品は、初地菩薩になった信相菩薩が懺悔念仏行を誓願、実践する内容である。即ち、この品は初信解する信相菩薩が初地へ入って大乘行を実践する内容である。第二如来寿量品は初地へ入る前の段階の隨事行の修習次第の内容であり、第三三身分別品は初地へ入るための理入の段階として理觀を觀ずる隨識行（三性三無性觀と三身分別觀）の内容であるが、第四懺悔品は如来光明眞身觀を修習する隨如度行の内容である。要するに『金光明經』は元曉の觀行論を具体的に説明してくれる經典であるといえる。元曉の『金剛三昧經論』の十重法門の第三門の三身説と、この『金光明經』の三身説とを関連させて考察すると、『金光明經』の三身分別品では三性三無性觀と三身分別觀を説いているが、元曉は『金剛三昧經論』の第三門で觀心の三仏身觀と三性三無性觀を説いている。また『金光明經』には如来光明眞身觀を第四懺悔品にまとめているが、元曉は『華嚴經疏』で如

来光明眞身觀の六双修として説明している。要するに元曉の觀行論は『金光明經』の信相菩薩の修習の次第を通じても知ることができる。

『金光明經』³⁸では、法身の般若は応身と化身の根本であるが、人間の上に顯現しようとする応身と化身によって存在することができると言う。即ち、仏教というのは、化身と応身によって法界が淨化せられることによって仏教の本當のまことというものが法身として顯現すると積すのである。これこそは仏菩薩の悟り、法界であると言うのである。『金光明經』ではまた三身分別説に基づく三性三無性觀を説明する。即ち、凡夫は三仏身を觀ずるときに、思惟分別相、依他起相、成就相を能解、能滅、能淨することによって化身、応身、法身の三分別相を滅ずることができると言う。そのような觀法は三仏身觀と三性三無性觀であるといえる。要するに『金光明經』の序品、如来寿量品、三身分別品、懺悔品の内容は、元曉が『金剛三昧經論』などの著書で一貫して主張した觀行論であるといえる。『金剛三昧經論』では一応三慧觀と三佛性の觀心を言っているが、『金光明經』は三仏身觀と唯識の三性三無性觀を説いている。即ち、両書の觀法は殆ど同じであるといえる。要するに、元曉は『金光明

『經』のこの觀行を自分が一貫して主張した觀行論と一致していると考えたから、次のように言っているのである。

可略而言、開二門於一心。總括摩羅百八之廣詰。示性淨於相染。普綜踰闡十五之幽致。至如鵠林一味之宗、鷲山無二之趣。金鼓同性、三身之極果。華嚴瓔珞四段之深因。大品大集廣蕩之至道。日藏月藏微密之玄門。凡此等輩中衆典之肝心。一以貫之者其唯此論乎。

六 『金光明經』の金鼓懺悔念仏行

元曉は『金光明經』の金鼓懺悔念仏行を諸仏の衆生教化の極果であると評価したといえる。元曉は仏教の本當のまことというものは、化身と応身によって法界が淨化せられることであると一貫して主張しているからである。『金光明經』の懺悔品は、初地に入った信相菩薩が聖者として、育て保つ仏智と共に遍く衆生をまもり育てる行入の内容である。この品では、信相菩薩は夢で金鼓と象徴された仏性を見、聖者となって自分の仏智を育て保つことを歡喜するし、また同時にその仏智を普く衆生へ伝えるために金鼓懺悔念仏行を誓願している。初地菩薩の信相菩薩は、金鼓の光りの中で諸佛を見ると同時に婆羅門のような一人が金鼓を撃しながら懺悔念仏行をす

る夢を見る。また信相菩薩はその婆羅門の念仏の声で目ざめ、自らその金鼓懺悔念仏行を誓願している。この經の空品、功德天品、善集品にも信相菩薩はこの金鼓懺悔念仏行を誓願する。即ち、この經はこの金鼓懺悔念仏行をくりかえして強調している。元曉は初地菩薩の行入を一乗人の教化菩薩行、如来禪行の一行三昧であると言ひ、一乗教行は三界へ入っても證得智を取らず、世俗心を起しても染らず、衆生を教化しても退屈せず大乘菩薩行であると言ふ。元曉はまた如来禪行者は如来眞身の光明のように衆生のために応身、化身として法界を清淨しなければならぬと言ひ、如来の眞身は教化菩薩と顕現するべきであると言ふ。要するに、元曉は金鼓懺悔念仏行を如来の眞身の顕現として評価し經名を金鼓經と言っているのである。

金鼓經説 三十二相八十種好等相 名為応身、隨六道相所現之身、名為化身。

この經の信相菩薩が無心定中に婆羅門の懺悔念仏や金鼓の音で目ざめたことは、三仏身觀を觀じるところ三仏性の空性を悟って、その仏性を人格化して自心中に見たことである。元曉はこのような修觀心の変化過程を次のように表現している。

數數思惟如是夢權、漸漸修得如夢三昧
由此三昧得無生忍 從於長夢豁然而覺。^{④③}

元曉が言うように、信相菩薩は如夢三昧の無心定中に金鼓と象徴された如来光明眞身を見たのである。信相菩薩は諸仏同体の法身、諸仏同意の応身、諸仏同事の化身がそれぞれ三体の意味ではなく、一体の如来光明眞身が諸法の実相であることを覚つたのである。如来の光明に諸仏の同体、同意、同事が顕現するのを覚る信相菩薩は自らそれを実現しようとする。即ち、それは法如如智の如来智の一乗行である。元曉はこれを觀行者の自性身から受用身、受用身から變化身への変化の一体化の過程であると言う。即ち、これは菩薩の願行とその果（法を享受することと清淨国土行）である。淨土教學的に言えば、往相と還相のプロセスに当たる。即ち、大乘一心の自利他行のプロセスである。信相菩薩の金鼓懺悔念仏行は、自性法身を受用し變化して成就する自己同一性（正体性: *identical*）の顕現、一体化であり、その一体化の顕現を衆生教化の念仏行のなから求めることである。元曉は『華嚴經疏』で如来光明眞身觀を如実に觀じて無所有の法理を覚つた後に、自ら如来心の無住無得智を衆生のために轉化しなければならぬと言つて、六双修

の無障碍門を説明したことと、元曉が自ら無碍歌舞念仏行の仏事をしたことは、元曉の自利他の教行の両面を示すのである。元曉の無碍歌舞念仏行と信相菩薩の金鼓懺悔念仏行は、仏という聖の受用であり、自ら仏という聖の具現化の仏事行のプロセスであるといえる。諸仏の仏事は衆生の根機に従つて衆生界に相應する婆羅門の姿、踊り、金鼓（鉦）、懺悔偈頌を通じて行うことができる。衆生はそのような如来藏教と如来行を通じて仏意を知り、仏とともに同体となることができるのである。要するに、元曉は信相菩薩の金鼓懺悔念仏行の仏事を高く評価し、強いイメージを持っていたから、『金光明經』を金鼓經と呼んでいるといえる。そして元曉が嚴莊へ教えたという錚觀法は、往生淨土説話に出ることを考えると、『金剛三昧經論』、『華嚴經疏』に一貫して主張している向上門の觀法（隨事行と隨識行）であり、金鼓懺悔念仏のように、衆生の根機に合う金鼓（鉦・どら）や無碍歌舞とともに演出する隨如度行の念仏行であると言うことができる。即ち、錚觀法は『華嚴經疏』の六双修の中に第三の聞佛音と見仏身の双修觀法である。また元曉が無碍歌舞念仏行の仏事をしたことは、『金光明經』をいつも金鼓經と呼んだことから考えることができる。即ち、この

經の信相菩薩が自身の自性法身の受用、変化として金鼓懺悔念仏行の仏事をするように、元暁も自身の宗教的修行の完成を自利利他の仏心行である金鼓懺悔念仏の無碍歌舞念仏行として顕現したといえる。

結 論

元暁が『金光明經』を金鼓經と呼んだことは、この經の三性三無性觀を感ずる唯識觀と金鼓懺悔念仏行の実相般若觀の中で、実相般若を高く評価したことを示唆する。

一心の三般若菩提は、三性三無性觀の実践觀行を通じて般若菩提の究極、即ち、空性を證得するのであるが、実相般若は衆生済度の自利利他行として佛の聖なることを顕わし示して見せるから、宗教としての仏道を聞くことは、この実相般若であるといえる。即ち、仏教のまことというものがわれわれ人間の上に現われるから、元暁は実相般若を重要視したと考える。そのような意味で元暁は無碍歌舞念仏行として仏のまことというものを顕わし示して見せたといえる。元暁が嚴莊へ教えた錚觀法はこのような実相般若の世界へ入らしめられる教えである。『三国遺事』で嚴莊が懺悔しながら錚觀法を修習したと記録されている。即ち嚴莊は散乱心中に口称念仏をしな

がら三身觀を觀じたと解釈することができ、また、そのことを逆にいえば、元暁の六双修の中の第三聞仏音と見仏身を実践することが、錚觀法であるといえるのである。今まで伝説とされてきた元暁の無碍歌舞念仏行と錚觀法は実際に元暁が教法的に完成し自ら顕現する仏事であることを知ることができた。即ち、元暁の無碍歌舞念仏行は、金鼓懺悔偈頌念仏行であるといえる。この仏事の道具は瓠壺より金鼓（鉦、どら）であり、念仏の偈頌は金鼓懺悔偈頌であり、無碍舞は『揮双袖所以断二障、三與足所以越三界』^④のような舞であると考えられる。

『三国遺事』の広徳嚴莊の往生説話を再び検討すると、広徳は正定聚であるから『觀無量壽經』の十六觀を定心に念仏しながら修觀した。そして第十二普想觀で浄土へ往生したといえるが、嚴莊は不正定聚であるから、元暁は散乱心でも觀することができると方便觀と顯了義十念の口称念仏を教え、彼を浄土へ往生させたと言っている。散乱心中でも觀することができると方便觀と顯了義十念の口称念仏は、元暁が衆生教化をするときにしたといわれる無碍歌舞念仏であるといえる。

註

- ① 田村円澄…日本仏教史Ⅰ、二八七～二八八
- ② 一然…『三国遺事』卷五
- ③ 元暉…『涅槃宗要』、大正34、八七〇、c
- ④ 元暉…『法華宗要』大正34、八七〇、c
- ⑤ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九六五、a
- ⑥ (A)法藏…『探玄記』大正35、一一一、a、李通玄…『新華嚴経論』大正36、七三四、c。
(B)慧苑…『刊定記』卍統藏経五卷、九、澄観…『華嚴経疏』大正35、五一〇、a
- ⑦ 元暉…『涅槃宗要』大正38、二五五、c
- ⑧ 表貝…『華嚴経文義要訣問答』卷第二、統藏経八、四二五、b、九項～一六項
- ⑨ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九六四、b、二二二項
- ⑩ 元暉…『華嚴経疏』大正85、二三四～二三六
- ⑪ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九九七、a・b
- ⑫ 元暉…『遊心安楽道』大正47、一一〇、b
- ⑬ 元暉…『遊心安楽道』大正47、一一〇、b
- ⑭ 元暉…『無量寿経宗要』大正37、一二六、c
- ⑮ 元暉…『遊心安楽道』大正47、一一〇、c
- ⑯ 元暉…『遊心安楽道』大正47、一一五、c
- ⑰ 元暉…『無量寿経宗要』大正37、一二九、b
- ⑱ 元暉…『仏説阿彌陀経疏』大正37、三四八、a
- ⑲ 元暉…『遊心安楽道』大正47、一二九、a、b
- ⑳ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九六一、a、b
- ㉑ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九八五、a一九～二二

- ⑳ 項
- ㉑ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九八五、b、七～一六項
- ㉒ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九八五、c、八項、と一七項～二二項
- ㉓ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九八五、c、八項、と一七項～二二項
- ㉔ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九八七、c二項～一七項「三門者…自帰三仏而受三戒。順三大諦得三解脱。等覚三地、妙覚三身。入三空聚、滅三有心」
- ㉕ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九九七、a
- ㉖ 元暉…『大乘起信論疏』大正44、二二三、b
- ㉗ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九六二、b、c
- ㉘ 元暉…『起信論疏』大正44、二二一、b、一二～二〇項
- ㉙ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九八八、b
- ㉚ 元暉…『金剛三昧経論』大正34、九八八、c
- ㉛ 元暉…『華嚴経疏』大正85、一三四、c
- ㉜ 元暉…『華嚴経疏』大正85、一三五、a
- ㉝ 元暉…『無量寿経宗要』大正37、一二六、c
- ㉞ 元暉…『無量寿経宗要』大正37、一二七、b
- ㉟ 元暉…『華嚴経疏』大正85、一三六、a
- ㊱ 元暉…『起信論疏』大正44、二〇一、b
- ㊲ 『金光明経』は現在三卷(漢文異訳本と西藏本)がある。この経の梵文断簡が中央アジアに発見されているので、これによると、その梵文名は、svavaprabhasohama、即ち金光明最勝である。一般的にこの経は svavaprabhasottama (金光明)と通称されている。この

経の最初の漢訳は曇無讖によって五世紀初葉に完成された四卷本金光明経である。新訳は七世紀、義浄が訳した『金光明最勝王経十卷』である。即ち、漢訳は次のようである。

- ① No. 663. 『金光明経』…曇無讖(二八五～四三三年)訳
 ② No. 664. 『合部金光明経』…曇無讖(二八五～五三三年)訳
 ③ No. 665. 『金光明最勝王経』…義浄(六三五～七一三年)訳
 即ち、元暁が読んだと考えられる本は、元暁の生存年代(六一七～六八九年)を参考して見ると、No. 664である

といえる。

- ③⑧ 曇無讖訳…『合部金光明経』大正16、三六一
 ③⑨ 元暁…『起信論疏』大正44、二〇二、b一〇～一六項
 ④⑩ 元暁…『金剛三昧経論』大正34、九八八～九八九、a
 ④⑪ 元暁…『華嚴経疏』大正85、一三五、bと『起信論疏』大正44、二〇三、c、一三～一九項
 ④⑫ 元暁…『起信論疏』大正44、二一八、c～二一九、a
 ④⑬ 元暁…『無量寿経宗要』大正37、一二六、c
 ④⑭ 元暁…『大乘六情懺悔』一卷、大正45、九二、b
 ④⑮ 李仁老…『破閑集』卷下、(朝鮮古書解題)四八頁